245

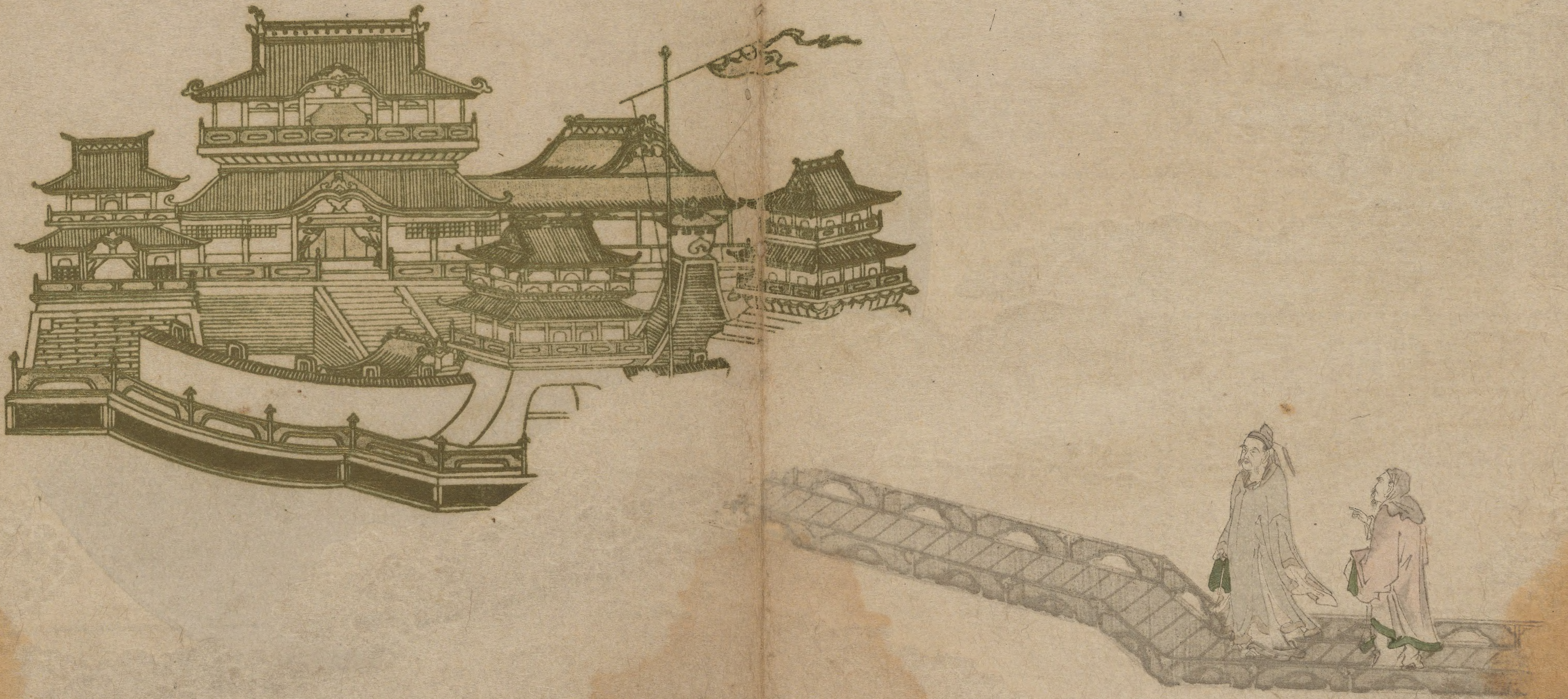
紅梅

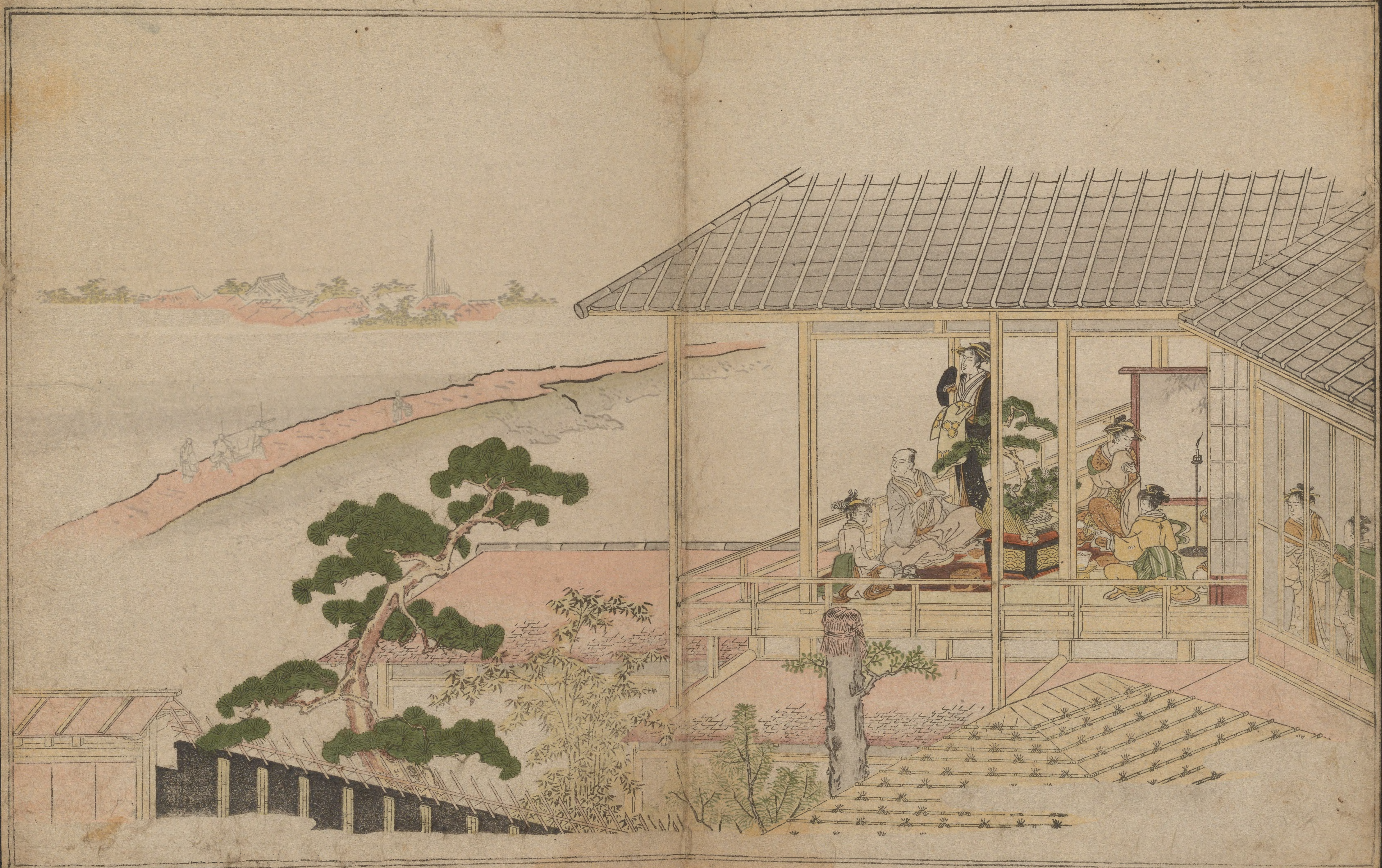
105

狂月坊序

月出て野より出月入て野に入へきむさしのゝ
人まどはせの月のかつらの風流にあそびし軒を
出て都に入ては江戸ちやんべ乃かてにや世れざえん
往来乃たえまなきはけしきむさし野のひろさ
おもんはかりにちまたく川のこちらとたえず
根のうまき地代よき外のこどもとともなのして
こよひの夜くもあらざれど二里の山本をと
めぐさらしむかしゆかりさもあらざれど月は名にこそあれ
むさし坊弁慶さんの力にもみぢんもどうぞ
うつよき角にあしかりける此頃そかたの
きりくこそなるべくもあらばわらひの狂の心し
為の吸物尾花のかり神一寸おもひのおかしさと
その心の雁は一両八町茶ほどこの文のおもくづらしく
三味の音ぐるとくになんかよりねぶはいけに
ろくり師匠も勇子もへちまの皮を蔵るところは
谷川の水の月ともさるかの晴月の光まけ
ときれてもみのひかりさやかなる紅風乃
音まねかるけれたるかたのせきありても
通もしと梅つきの梅もちつきのひまあらで
狂月坊となん名づけ侍るべし

紀定丸





康津部志郎

照月のかつら男も見ゑと飛てハいまもかけこむ女あるまし

盃　茶人

たちならく家くことの月見れハ信濃の田毎その数そえ

田原船積

おいらんとあともなかのよし原や桂の木性月れある性

高利苅主

思ひこふ玉よ底たゝきりふれ月中よりの声のみとしゆくも

此花咲吉

今宵また難波のふつよ見ゆるなあしられ阿弥陀が池の名月

呉竹よなけ

こち汐の雪のたつ海中ゆきすてゝ月もさんとのかけとくしと暑

鳴瀬音人

やまくの深きさけをやさらしなの月をもまゑつまかくれけれ

伐本吉彦

若あとなむる秋の月のまくら心よ見ゆる雪にうるさし

芦邊田鶴丸

潔白な月の眼よにらまれて世界よ雪のかく姥捨ハなし

浅草市人

ころもはやくもちかくそら月れかけも見ゆるやましたる石山

鬼面成

雲井よりうりて水よすゞた川白き八月れ都鳥ゝと

篠野玉涌

こよひとぞ稲ひよせくる忍さし棹さして嬉しきらしの月影

千家茶来

名月ハたつた一ッの玉よ后ふるさ夜もこの夜も明るそなし

玉根豊風

四文銭の浪よくと出る月影ハ浪の底まてさし通すなり

麻暦新笑悌

すみのぼる今宵の月れ鏡とぞちりをくもらしめ天下一なれ

言村為世

暑ほしうつ色をさえ空をあらい上たるこくらの月

園胡蝶

千金の光を山乃端としるのろれしかくしてもほまれなれ

浅黄裏生

唐土れかくこゆかすと銭国よとも飛秋の仲麻呂の月

定紋揚丸

世の人の眼ハ星よとも物ありなたつた一ッの月をとそろ[illegible]

鐵屋金埒

ひとつく田毎の数とかそへれハ十人ぞのにらしなる乃月

大屋裏住

まんまるな玉のやうなる桂男とうちむしたるさんと十五夜

一冨士二麿

千金の春の夕と十らせく秋のよるハまさりとまん月

人ま似こまね

猟師すら今宵殺生まてる月の色を得ては因をわすれし

大京さらね

さは月の近江表に風もなくたゞさゞを数ゝ波水うみ

百喜高

川上乃菊那して流るゝ今宵月のかけまちられて人も涼めり

今田部宜住

まちゐる三笠乃山を照月も簾のうちハその果まくもなし

檜香義吉

雲あるハきらしへ十日の雨の後あまね五日の月の下風

蝶枝鞠

月くもらし木にまして照月の桂ハりやこゝに木かすゝん

無所世須

むさし野ゝけしきに我ハのまれて月まくらの中に社入れ

雑唯流

菊とい縁て結まつけたる盃のあいさらは一もと月の影

紀信援

金たゆたうねとすゝきなり月にむらかるくまくまもまつ

未問何也

八月はやき雲の帯をも見けしとなきめあさはみそらの月

下手長文

まんねく盃なりに出舟も下たと見えたるまゝ月の影

かく道批

墨なく照は浅く池の月浪のうねくときや志らくん

紀長人

淀雲ハとく逃てみやむさしの秋の月よ風とくらふく

三方色歴斗

まんねよ人のこゝろも曇なくて秀ともやまともあひらの月

無筆秘裏

うきしきハ身にそう縁ねと志らくゝの田子にも今宵の月の影

東江鈍記

あつ尾のかねになりこゝ思ひもすゞし月とらゆるあいたくにかけたり

那方氏筆方

儀うつ半と圓子の踊り柚子くさをかけし十五夜の月

麦年宮丸

天もまゝいつそりある至りゝの月志かくとしれ玉子の小せりけれ

かくまでもさやかにてる海の月かけを須磨もあかしもみやまし

つふり光

こゝろさす須磨や明石よのけしきにハりし月のわた海

腹唐秋人

十寄のかけめぐる夜の月なれハ三五十五とりたてゝ宵

老込年寄

須戸の浦松よりすゝし網のひかるかとおもふのつきかけ

窪俊満

田子の浦よ打出て見れハ雪よりも猶まさり月の赤人

浜音丸

今宵しもひつまめ月の雲まつゆ面白ふよさえまさる程経

附子多加久

のみつくす酒ハ四斗樽よかすまてその月とともにあ

寿々屋金彦

月一つはしまりたる海門のかけハなんまんなんぜん部列

蔦唐丸

その夜や三五新たに月の影にさしてむ

三陀羅法師

いくたもの栗穀ありとも今宵斗ハ十五州の千金の月

市仲住

宿屋飯盛

月の中に霓裳羽衣やまうなんともむなしき雲の一さし

唐衣橘洲

なかそうり婦りも二つもなき月の色ハ千里の外てらす宵

寛政己酉秋八月

右五葉

喜多川歌麿製

東都書肆　耕書堂發行